

## ①

恋愛関係の初めにあつて、この関係は永遠なるべしと信じない男に禍いあれ！手に入れたばかりの女の腕の中にありながら、しかもなお不吉な予見を抱き、いつかは女の腕を振りほどく時があるかも知れないと見通す男に禍いあれ！おのが心臓に引きずられてゆく女には、その瞬間、何かいじらしい神聖なところがある。恋を汚すものは、逸楽でもなければ、自然でもなく、官能でもない。それは社会がわれわれに覚えさせる打算と、経験から生まれる熟慮反省とである。エレノールが身を任せてからは、私はそれまでもりもずつと彼女を愛し尊敬した。私は人々のまん中を誇らかに歩いては、彼らの上に支配者のような視線をやった。呼吸する空気はただそれだけで楽しみであった。私はよくも自然が与えてくれた、この思いがけないめぐみ、この大きなめぐみを感じするために、自然のふところへ飛んでいった。

## ②

(……) 彼女は私が死んでもいたら自分も生きてはいなかったらと絶えず私に断言した。私は情に感じ、良心の呵責にさいなまれていた。かくもかわらぬかくもやさしい愛着に報いるだけのものが自分の心の中に見いだせたらと思つた。私は、追憶や、想像や、さらには理性や、義務観念にまでも、救いを求めた。が、甲斐なき努力であつた！立場の困難、いずれは私たちを裂くに決まっている未来、おそらくはまた断ちがたいきずなに対する一種の反抗心、といったものが私を内に悩ましていた。私は女に隠そうと努めているわが身の志恩を自ら責めた。彼女がその身に無くてはならぬ私の愛を疑っているように見える時には、私は悲しかった。とはいえ、彼女がこの愛を信じているように見える時には、それに劣らず悲しかった。私には彼女が自分よりもすぐれているような気がした。彼女にふさわしからぬ自分がさげすまれた。愛して愛されないのは恐ろしい不幸である。しかしもはや愛していない女から熱烈に愛されることは実に大きな不幸である。エレノールのために賭したばかりのこのいのち、彼女が私なしに幸福になるためとあらば、私はこのいのちを千度でも差し出したであらう。

## ③

私は生命なきエレノールのそばに、永いこと身じろぎもせず留まっていた。亡くなったということがまだ心のみこめなかつた。私の眼は呆然おどろいてこの生命なき肉体を眺めていた。小間使の一人がはいって来て、悲しい知らせを家じゅうに伝えた。身辺に起こつた物音が私を自失の状態から醒ました。私は起き上つた。と、その時である、胸の張り裂けるような苦痛

と、永遠の別れの恐ろしさとが、ひしひしと感じられたのは。人々の動き、かの俗世の営み、もはや死者にはかかわりのないあまたの配慮と騒々しさが、私の、永びかしていた幻想、なおもエレノールとともに在るような気がしていたあの幻想を、吹き散らしてしまつた。私は最後のきずなが切れ、おぞましい現実が永遠に彼女と自分とのあいだに挟まつたのを感じた。かつて奪われてはあれほど惜しんでいた自由、あの自由が今や私にはどんなに重苦しいものとなつたことであろう！かつて私にしばしば堪えがたい思いをさせた束縛、あの束縛がないのが今や私の心にはどんなに物足りなかつたことであろう！ついこのあいだまで、私の一切の行動には一つの目的があつた。私は自分の行動の一つ一つで、女に苦痛を免れさせてやることもできれば、歓喜をもたらしてやることもできるという確信があつた。私は当時はそれをこぼしていた。近しい者の眼が自分の振舞いを観察しており、他人の幸福が自分の振舞いにかかつているのが我慢できなかったのである。ところが今は誰ひとり私の振舞いを観察する者もなかつた。私の振舞いなどには誰も関心を持たなかつたのである。誰ひとり私の時間を割いてもらおうとして一刻を争う者もなく、外出すればとて呼び返してくれる声もなかつた。げに私は自由なのであつた、もはや愛されてはいないのであつた、すべての人々にとつて他人なのであつた。

『アドルフ』大塚幸男訳(岩波文庫)